

村上春樹『1Q84』における主題

160140 岡 あずさ

序章

村上春樹は現在の日本人作家の中で最も有名な一人である。彼の作品は20か国以上の国で翻訳され、初期作品から近年の作品まで多くの人に親しまれている。彼は1949年に京都で生まれた。その後兵庫に転居し、高校時代まで暮らした。19歳で早稲田大学第一文学部に入学し、在学中にジャズ喫茶を開く。26歳で早稲田大学を卒業し、その後もジャズ喫茶を経営しながら生活していたが、29歳の時に神宮球場で野球を観戦中に小説を書くことを思い立つ。そしてデビュー作である『風の歌を聴け』(1979)で群像新人文学賞を受賞した。その後は短編、長編、エッセイなど様々なジャンルの作品を執筆する。1987年に出版された『ノルウェイの森』は上下巻1000万部を売るベストセラーとなり、これをきっかけに村上春樹ブームが起きた。翻訳活動も多く行い、スコット・フィッツジェラルド、レイモンド・カーヴァー、トルーマン・カポーティ、レイモンド・チャンドラーなど数多くの翻訳作品を残している。

彼の作風は初期から現在までかなりの変化を遂げている。作風の変化はどの作家でも起こりうることだが、彼の作品ではその転換点をはっきりしており、村上自身もそのことについて語っている。作風の大きな変化のきっかけとなったのは長期間の海外生活、そして日本の歴史的な出来事である阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件である。その変化について村上は「以前はデタッチメント(関わり)のなさ」というのがぼくにとっては大事なことだったが、「コミットメント(関わり)ということについて最近よく考える」ようになり、「小説を書くときでも、コミットメントということがぼくにとってはものすごく大事になってきた」と語っている(河合・村上 18)。ここでいうコミットメントとは社会や個人との関わりをもつということであり、その程度というのは初期作品と、90年代後半以降の作品とでは大きな差がある。デタッチメントの代表的な作品として『風の歌を聴け』、『ノルウェイの森』などがあげられる。一方コミットメントの代表作は『アンダーグラウンド』(2000)、『神の子供たちはみな踊る』(2000)、『1Q84』(2009)などがある。これらの作品ではオウム真理教やその関連事件、阪神淡路大震災など当時の日本社会を色濃く反映した内容となっている。中でも『1Q84』では、作品におけるコミットメントという新たな面とともに、村上春樹の小説でよく登場する戦争記憶の描写など、村上作品の特徴のあらゆる要素が盛り込まれた作品と言える。そこで本論文では『1Q84』の分析を行い、作品の主要テーマと作品に込められたメッセージを明らかにすることを目的とし、考察を行う。

『1Q84』は2009年にBOOK1、BOOK2が出版され、翌年の2010年にBOOK3が出版された。日本だけではなく世界中で大ヒットし、今では村上春樹の代表作の一つとなっている。

る。そしてその謎の多い内容は議論の対象となり、多くの解説本も出版された。『1Q84』が単にエンターテインメント性の高い人気の作品ということだけでなく、物語の裏に隠されたメッセージを多く含んでいると推測できる。

本稿の第一章では村上春樹の作家としての立ち位置について考察する。彼はその作風の特徴や作品のエンターテインメント性の強さによって研究者から批判を受けることもあれば、その価値を見出した研究者や、一般読者からの高評価を受けることもある。また国内と国外での彼の評価の違い、国や地域ごとでの違いもある。そこで第一節では村上春樹作品への評価について考察をする。またそれらの評価の理由となる彼の作品の特徴を第二節で考察する。

第二章では『1Q84』の内容について、特に親子に焦点を当てて考察する。本作に登場する主な親子は、親子関係を一度は断絶していることが特徴である。また、主人公の天吾と作者の親子関係には共通する部分が多い。第一節では作中に登場するそれぞれの親子関係の特徴について分析する。第二節では作者と父親の親子関係について分析し、作中親子との関連性について明らかにする。

第三章では『1Q84』での善悪の在り方について考察する。本作では悪の行為を正義として行う登場人物など、善悪があいまいに描かれている。第一節では物語中の善悪それぞれの側面を持つ人物や彼らの行動、役割について説明する。第二節ではそういった善悪のあいまいさを描くことで、作者はどのようなメッセージを伝えたかったのかを分析する。

第四章では『1Q84』で描かれる記憶について考察する。村上春樹の作品において記憶、特に戦争の記憶の描写というのは頻繁に物語中で描かれている。そして、それらの描写は村上春樹ならではの、間接的な記憶の描き方という特徴がある。そこでこの章では記憶の描き方と、作者が記憶を描き続ける理由とそれらの描写に含まれるメッセージ性について彼の他の作品にも言及しながら考察していく。

第一章 村上作家としての立ち位置

村上春樹の作品はかつての日本文学とはかなり作風が違い、日本らしさの欠如や欧米らしさが特徴といわれている。また、どの文学とも違う村上らしさというものも特徴としてある。そこで本章では彼の作品の評価、作品の特徴について考察する。はじめに、日本国内、欧米、中国での村上作品の評価について、その共通点や相違点に着目しながら、各国での村上作品の位置づけについて分析する。次に『1Q84』を中心に、他の作品にも言及しながら彼の作品の特徴について分析する。作家として、そして作品そのものの村上ならではの部分を見出すことによって、彼への評価や、彼の作品の人気の理由を明らかにする。

第一節 国内外での作品への評価

本節では村上春樹の作品について日本国内、欧米、中国に分けて考察する。日本国内については、村上作品が高評価、低評価の両方を受ける理由について明らかにする。欧米については、村上作品が他の日本文学とはとらえ方が異なっていた理由について、時代背景を踏まえながら考察する。中国については歴史的な関心から読まれることが多い点について作品の特徴について言及し、その理由を明らかにする。

村上について、日本国内では評価は高評価と低評価の二つに分かれており、それは他の作家よりも顕著に表れている。村上が作品を書き始めた初期は批判されることが多かった。とはいえ、彼はデビュー作で群像新日本文学賞を受賞しており、初期作品から今に至るまでその人気は持続している。それにもかかわらず、村上への批判が目立つ理由として、文学研究者からの批判が大きかったことがあげられる。今でこそ村上の知名度とその作家としての地位は確固たるものとなっているが、初期の段階ではそれまでの日本作家、日本文学における良い作品の特徴、純文学であることや登場人物の日本人らしさが村上にはなかったため、高評価の対象とならず、むしろそのような要素を含まないこと、また今までにない独自の作風を取り入れたことによって批判の対象となった。それまでの日本文学においては純文学や私小説が一般的であり、高評価を受ける対象となる作品もそのようなものが多かった。

序章でも触れたように、村上の初期作品において、社会へのメッセージや社会問題の反映というものは小説にあまり取り込まれなかった。村上は「何かのメッセージがあつてそれを小説に書く」という方もおられるかもしれないけれど、少なくとも僕の場合はそうではない。僕はむしろ、自分の中にどのようなメッセージがあるのかを探し出すために小説を書いているような気がします」と述べている（河合・村上 79）。つまり、村上の初期の作品は読者や社会に影響を与えたり、社会問題の提起をしたりという、高評価を得やすい要素があまり含まれなかったのである。このようなことから村上の作品は日本文学の中でも異端であり、メッセージ性もない作品として、文学研究者たちからは排斥されてしまったのだと考えられる。しかし村上の作品がより多くの人に読まれるようになり、その作風が一般化してからはそういった批判も少なくなってきた。

一方でいまだに批判の対象となる部分もある。それは作品のエンターテインメント性の

高さである。村上作品のエンターテインメント性の高さは多くの人に読まれる理由にもなっているが、そのエンターテインメント性の高さによって作品のメッセージ性が薄まってしまうという批判もある。しかし、この特徴がなければ、村上作品がこれほど世界的にヒットするとは考えられない。作品が読まれなければ作品のメッセージが伝わる可能性はゼロに等しい。多くの読者を獲得するうえで、ある程度のエンターテインメント性の高さというのは必要なものであると考えられる。

一方欧米では、村上作品は日本文学としてだけではなく、日本文化の一部としてとらえられている。村上の作品が世界で出版され読まれ始めた 1980 年代頃、ちょうどアニメや漫画など、日本の新しい文化、ポップカルチャーといわれるものが世界に発信され始めた。このことと、今までの日本文学とは違った作風で、欧米文化を多く取り入れた村上作品は日本文化の新たな一面としてとらえられた。また、村上以前の欧米における日本文学研究では、英米文学にはないエキゾチックな面が強調されてきた。戦後すぐに出版された、アメリカの文化人類学者の Ruth Benedict による *The Chrysanthemum and the Sword* (1946) に代表されるような日本的な面、例えば恥の文化や組織主義なども村上の作品ではあまり登場しない。Suter によると、アメリカでのレビューでは頻繁に“un-Japaneseness”や“the symbol of new Japan” (37) などの言葉が使われたという。こういった日本的な特徴の欠如、西洋文化の頻繁な登場によって村上作品はグローバル化の象徴的な文学ととらえられた。

中国では日本とも欧米とも違った視点が向けられており、村上作品への着眼点が歴史的な内容であることが多い。村上作品では中国と日本、両国に関連ある歴史の描写が多く登場する。『1Q84』では主人公の一人の青豆が 1930 年代の満州鉄道についての本を読む場面や、もう一人の主人公天吾の父が戦後、満州から引き揚げてきた話などが登場する。『1Q84』以外の作品にもこういった中国に関連する歴史の描写は多い。また村上は『中国行きのスロウ・ボート』(1983) という短編小説も書いており、中国に対する関心の高さがうかがえる。このようなことから、中国の読者の多くが日本人から見た日中の歴史に関心を持ち、村上作品に触れることが多いと考えられる。中国において村上作品は文学として高い評価を得ているというよりは、日本から見た日中の歴史を知る道具として用いられ、多くの読者の関心を集めているのである。村上の作品における日中関係に関連する描写において、日本を批判的に書くことであつたり、また中国を批判的に書くことも見受けられない。そのため、日中関係の描写が理由で作品が批判されることは中国側からも日本側からもあまりないと考えられる。

村上の作品は日本においてかつて頻繁に批判の対象となったものの、その独自性が村上の文学として確立され、多くの人に認知されるようになった。それからは低評価を受けることは少なくなってきたものの、いまだにエンターテインメント性の高さなどによって批判されることもある。また日本国外における評価として、アメリカでは彼の作品が日本文化の新たな一面としてとらえられていることが明らかになった。中国では、作中に日中の歴史に関する描写が多いことから、歴史的な側面に注目されることが多い。以上の日本、アメリカ、

中国における作品のとらえられ方の比較から、村上の作品は国によってその着眼点が異なると言える。

第二節 作家および作品の特徴

本節では村上春樹作品の人気の理由、及び他の日本人作家との差異を明らかにするため、彼の作品の特徴である欧米的な面を、彼がそのような作品を書くようになった背景にも触れながら論じる。また、彼の作品に欠如している日本的な面と、その欠如の理由、近年の作品における日本的な面について、村上春樹の日本文学に対する考えを踏まえながら考察する。そして最後に作家としての特徴、特に作品のプロモーション方法における他の作家との違いについて明らかにする。

村上春樹の作品について、日本文学らしさの欠如が頻繁に指摘される。また、日本語に翻訳された外国文学のような印象も受ける。村上自身も、日本文学に対する考えを、「ぼくが小説を書きはじめたときに、先行する小説家のスタイルのなかに真似したいというものがなかったのです。(中略) これまでのいわゆる作家のスタイルとはまったく逆のことをしてみようと思ったのです」(河合・村上 45) ということや、「我(エゴ) というものが相対化されないままに、ベタッと迫ってくる部分があって、とにかくいわゆる純文学・私小説の世界というのは、ほんとうにまとわりついてくる感じだった」(河合・村上 50) と述べている。また、彼は 29 歳まで日本文学に関心を持って読むことはなかったという。一方で、レイモンド・チャンドラーやトルーマン・カポーティ、スコット・フィッツジェラルドなどのアメリカ人作家の作品を多く読んでいた。これらのことから、村上春樹は日本文学、特に純文学、私小説に対して否定的な意見を持ち、小説家になる以前は日本文学に対してあまり興味がなかったことが分かる。そのため、10 代のころは英語で小説を書きたいと考えていた。というのも、日本語より英語の方が感情をダイレクトに表現できると考えたからである。しかし彼の英語のレベルでは無理だということを悟り、長い時間をかけて日本語で小説を書くようになった。彼はその一つの方法として、最初に英語で文章を書き、それを日本語に訳すという方法で文章を書くことがある。この書き方をすることで、読者は翻訳された海外文学を読んでいるような感覚になることがある。

また、彼は文学にとどまらず、西洋の文化、音楽、テレビ番組、ファッションなどにも魅了されていたという。それを反映するかのように、彼の作品には日本らしい文化はほとんど登場しない。例えば『1Q84』では冒頭からタクシーの中でヤナーチェックの「シンフォニーエッタ」が流れ、その他にも Queen、ABBA、などヨーロッパの歌手グループ、アルマーニ、シャルル・ジョルダンなどヨーロッパのファッションブランド、オーウェル、プルーストなどのヨーロッパ文学が登場する。その他にも人物、映画など、その量は彼がいかに関西文化に触れてきたかが分かるような多さである。また、彼の作品では主人公が食べるものもほとんどすべてアメリカまたはヨーロッパ的な食事であることも有名である。

ここまでは文化的な面に触れてきたが、村上春樹の作品における欧米らしさは登場人物た

ちの性格にもよく表れている。その一番の特徴は個として行動する面である。日本人は集団、組織を大切にするという概念は村上春樹の作品のほとんどの登場人物について当てはまらない。彼の作品に登場する主人公はほとんどの場合個人で行動し、組織、集団のために行動することはない。日本人の登場人物に日本人らしさが欠如していることは村上の作品ならではの特徴と言える。

しかし、2014年の小説『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』は主人公多崎つくるとが高校生の時に仲の良かったグループから突然自分が排除されたことについての謎を探るといふ、まさに日本人の集団主義を前面に出した作品であった。この設定は村上の作品の欧米的な面が物語から一気になくなったように感じられる。彼の作品の日本らしさの欠如という特徴は最近では薄れてきているのかもしれない。また、自身の日本文学に対する考えについて、「ぼくの十代のころ、大江健三郎さんがスターだった。彼はセックスとか死とか暴力に対して非常に主体的に取り組んで書いていたのですね。(中略) それとは違うものを書いてみたいという気持ちがありました。でも、結局行き着く先はそれしかなかった」(河合・村上 192)、加えて「日本語でものを書くというのは、結局、思考システムとしては日本語なんです。日本語自体は日本で生み出されたものだから、日本というものと分離不可能なんです」(河合・村上 48) という発言をしている。これらの発言からも、村上は日本文学や日本的な要素を自分が書くものから排除することは不可能であると感じていたことが分かる。しかし彼の言う通り、慣れ親しんだ小説がその文体、内容にも影響を与え、村上オリジナルの文学を生み出したというのとは否めない。また近年の作品を見ると、個人主義からの脱却や、日本社会にコミットした作品を生み出すなど、初期よりも日本を意識した執筆をしていると考えられる。

村上春樹の作品は文学でありながら、資本主義経済の中の商品ととらえることもできる。村上春樹以前の、純文学が評価された時代には、作品は人気を得ることよりもその文学的な価値が重視された。しかし、純文学に否定的な村上は自身の作品を商品として多く売ることに積極的であり、それはプロモーション方法からもわかる。その例として、1990年、『羊をめぐる冒険』のプロモーションのためにアメリカに渡ったり、2014年、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の英国版の発売を記念し、ロンドンの書店でサイン会を行ったりするなど、自分の足で宣伝に赴くことがある。こういった活動は、文学的価値を重視する作家たちにはあまり見られないことである。

また、村上の作品に関する解説本はかなり多く出ている。解説本の存在は作品の人気を助長するものであるが、その解説本を解説される本人である作者が制作に携わることはまずない。しかし村上の場合、それに携わったことがある。その例が『少年カフカ』という本である。村上春樹の代表的な長編小説のひとつ、『海辺のカフカ』(2002) が出版される際に、その出版社にて特設サイトを設立し、そこで読者からのメールを受け付け、それに村上自身が返信した。メールの数は8000件にも上り、彼はそのうち1200通に返信した。『少年カフカ』にはその内容がすべて載っている。また、2015年に出版された『村上さんのところ』

は同じくサイトで村上に対する質問を募集し、その中から抜粋した答えをまとめた一冊となっている。その時の寄せられた質問の数は3万7465通で、世界中から質問のメールがあった。このように読者と交流を持つことは作品自体への関心を高めることにもつながるだろう。そしてそれは結果的に宣伝効果も発揮し、作品の売り上げに影響を与えたはずである。以上のように村上は自著の宣伝に積極的な作家であると言える。

村上春樹の作品が欧米的であること、日本らしさが欠如している理由として、彼が子供のころから欧米文化に親しんできたことがあげられる。そして彼は自分が読んできた日本人作家と差異を生むために、英語で文章を書き、それを翻訳するというプロセスによって小説を書くことがある。そのプロセスが彼ならではの独特の文体を生み出していると考えられる。また作家としての特徴として、彼はサイン会の実施や解説本の制作などの宣伝活動にも積極的であった。他の作家の作品にはない村上春樹ならではの作風と、作者自身が積極的に宣伝活動を行っていることは彼の作品の人気の一因であると言える。

本章では村上の国内外での評価、作家及び作品の特徴について分析した。国内での彼の作品の評価は高評価と低評価に分かれており、その両方に共通する要因としてかつて高く評価された純文学、私小説といったジャンルから外れていることがあげられる。また国外では新たな日本文化のひとつとしてとらえられたり、歴史的な面からの関心があることが明らかとなった。村上の作品の特徴である日本らしさの欠如の一つの要因として、村上が子供のころから欧米の文学を好んでいたことがあげられ、彼は欧米の文化や日本人の特徴を含まない登場人物を自分の作品に取り入れている。また彼は自著のプロモーションに積極的であり、この点も他の作家とは違った村上ならではの一面であると言える。

第二章 『1Q84』における親と子

『1Q84』では主に四組の親子が登場する。それぞれの親子は何かしらの問題を抱えており、常に子供がその問題に悩む立場にある。そこで本章ではそれぞれの親子の問題について触れるとともに、そこにある共通点を明らかにする。そして唯一の完全な親子関係としての未来があるように描かれる、主人公二人とその子供の登場について、彼らの役割を考察する。また、村上春樹は自身の父親との関係についてインタビューなどで話すことがあり、物語中で描かれる親子関係も村上自身の経験が反映されていると考えられる。そこで村上の親子関係についても言及し、彼が『1Q84』で親子関係を描いた理由について考察する。

第一節 作品に登場する親子の特徴

『1Q84』で登場する親子は親と子の間で確執があるのが特徴である。一方で、その特徴に当てはまらない親子関係も存在する。そこで本節では物語中に登場するいくつかの親子関係に焦点を当て、それぞれの親子関係の特徴について論じる。

一組目の親子関係は主人公の女性青豆の親子である。青豆はスポーツインストラクターという仕事をする傍ら、暗殺者として裕福な老婦人の指示のもと、妻に暴力をはたらく男性たちを暗殺している。青豆の親は「証人会」という宗教団体に所属し、彼女と彼女の兄もその一員にさせられていた。しかし青豆は「証人会」の一員であることに幼い時から否定的な考えを持っていた。また、親とともに勧誘をすることや、食事の前に、たとえそれが学校の給食であっても、「お方様」という「証人会」であがめられている架空の存在に感謝の言葉を述べなければならないことはいじめの対象となる大きな理由になっていた。そこで青豆は親と決別することを決め、小学生の時点で親戚に引き取ってもらう。それ以降青豆は家族と一切会っていない。

二組目の親子関係はフカエリと彼女の父親である。彼女の父、深田保は宗教団体「さきがけ」のリーダーであり、元学者である。フカエリはその団体から逃げ出し、深田保の古い知り合い、戒野隆之のところに逃げ、「さきがけ」での生活を描いた小説を執筆する。「さきがけ」のリーダーであるフカエリの父は物語の途中で青豆によって暗殺される。というのも、彼はその宗教団体の少女たちをレイプしていたからである。しかしその宗教団体ではそれがレイプではなく一種の宗教行為としてとらえられている。フカエリが逃げ出した明確な理由は描かれていないが、父親、そして父親がリーダーである宗教団体へ疑問を抱いていたことが大きな要因と考えられる。

三組目の親子関係はもう一人の主人公の男性天吾とその両親である。天吾は青豆と小学校の時の同級生であり、塾の講師をする傍らで小説を書き、本職を小説家にしたいと考えている。彼の母親は実際には出てこないが、天吾の曖昧な記憶の中で、不倫をしている場面が度々登場する。一方父親は戦後満州から引き揚げ、その後 NHK の集金人として働く。子供のころ、天吾は毎週日曜日、彼とともに集金に付き合わされていた。父親は集金人という仕事に誇りを持っていたが、その仕事ぶりは決して尊敬できるようなものではなく、子供連れ

の方が集金しやすいという父の意図を見透かし、天吾は子供ながらに父親を恥じていた。そんな経験をした彼は大人になってからも日曜日が憂鬱になるほどであった。仕事以外の面でも天吾は父親に対して嫌悪を感じる事が多く、高校に入学してからは寮生活を送り、父親との関係はどんどん薄れていった。その関係は天吾が大人になり、父親が亡くなる直前まで改善されなかった。

天吾と彼の父親以外の親子関係を見ていくと、彼らは関係を断絶し、その原因となっているのは親の方である。また、親子関係の断絶はすべて登場人物が子供の時に自分の意思で行っている。しかしその中でも例外と言えるのは天吾と彼の父親との関係である。青豆とフカエリが最後まで親と接触することなく終わるのに対して、天吾は死ぬ直前の父親に会いに行く。彼は登場人物の中で親と向き合った唯一の子供と言える。彼は認知症でほとんど話もできず、相手の言うことも理解できていないと思われる父親に話しかけ続ける。そこで彼は父親の口から「私には息子はおらない」、「あなたは何ものでもない」(BOOK2 前編 224)、「あんたの母親は空白と交わってあんたを産んだ」(BOOK2 前編 235)という風に言われる。これら発言について天吾は衝撃を受けたものの、父親と血が繋がっていないのを期待していたこともあり、その事実を受け止める。父の死後、弁護士から、戸籍上は彼は父親と血が繋がっていることとなっていると知らされるが、その真相は謎のままである。天吾は父が亡くなる直前、意識のほとんどない父に向けて、どこに血が繋がっているのかは問題ではなく、「あなたは僕の父親なるものだ。それでいいんじゃないかと思った」(BOOK3 前編 299)と言う。そして彼は自らを納得させたことで、父親との関係について悩むことをやめる。また、父親が亡くなり、遺品の整理をしていると、そこからは天吾が載っている新聞の切り抜きや、賞状、学校の成績表など、天吾に関する品々が多く出てくる。そこで彼は、父親は仕方なく自分のことを育て、仕事のために利用していただけではなく、天吾に関心を持っていたのだと気づかされる。それまで天吾と彼の父親の関係については負の側面しか描かれなかったが、父の死をきっかけによりやく、義務としての親子だけという関係から脱却したととらえられる。このように天吾とその父の関係は唯一、改善に至った親子関係だと言える。

そして、物語に登場する四組目の親子は天吾と青豆、そしてその子供との親子関係である。『1Q84』に登場する唯一ポジティブな親子の形として登場するのは青豆と天吾とその子供である。彼ら以外の親子関係からは親子というものに希望を感じないような描き方が多かった。そしてその原因は親の偏った思想であったり、仕事、子供に対する態度であった。しかし、青豆と天吾の子供は彼らに愛され、大切にされて育つことが予想される。それは青豆が自分が妊娠して、子供について考えている場面からもよく分かる。「死力を尽くしてそれを護ろうとしている」(BOOK3 後編 56)、「彼と力を合わせ、この小さなものを大事に護らなければならない」(BOOK3 後編 161)、「誰にもこれを奪わせはしない。誰にも損なわせはしない。」(BOOK3 後編 234)といったような、子供に対する責任感と愛情が青豆から感じられる。この責任感と愛情は物語中に出てくる親たちに欠如しているものであり、青豆のそれが物語中で際立たせられている。天吾に関しては、物語の終盤で子供の存在につい

て知らされるため、彼の子供に対する感情はあまり描かれていない。しかし、「何があろうと君たち二人は誰の手にも渡さない。君もその小さなものも」(BOOK3 後編 366) というようなセリフから、彼も青豆と同じような感情を子供に対して持っていることが分かる。物語で描かれている限りの彼らの言動からはこの親子の負の面は見え、他の親子関係のような悪い関係になることは予想しにくい。

この他の親子として、天吾の年上のガールフレンドには夫と子供がおり、彼女が子供について語るシーンが出てくる。また、宗教団体「さきがけ」から依頼を受けて調査などを行っている牛河についても、かつて持っていた家庭と彼の美しい子供たちについて回想するシーンがある。青豆に暗殺依頼する老婦人にも子供はいるが、娘は彼女の夫からのDVによって自殺してしまう。これらの親子も負の面が強調され、家庭には何かしらの問題があるような描かれ方がされている。

以上のように、本作では親子の確執や問題が多く描かれているのが特徴である。その特徴があるからこそ、天吾と彼の父親のように親子関係を修復した親子や、青豆と天吾とその子供のような負の面が描かれない親子関係が際立っているのも事実である。次節では本節で分析した親子関係が村上の実際の親子関係とどのように関連しているかについて考察する。

第二節 作者自身の親子関係と作中の親子

前節では作品で登場するいくつかの親子について考察した。本節ではそれらの親子と作者と彼の父親との関係を照らし合わせ、そこにおける共通点について論じる。そして作者がそれらの親子を描いた理由について、彼自身の父親との関係と、父親に対する考えについて言及しながら考察していく。

村上の父親は1917年に京都の寺の次男として生まれた。仏教系の専門学校と京都帝国大学に通っていた時に徴兵されるも、無事に戦火を生き延びる。大学院時代に結婚し、子供が産まれたため、学業を断念して国語教師として働き始める。この子供が村上春樹である。春樹が幼かったころ、彼と父親は日曜日には自転車に乗って一緒に映画を観に行ったり、野球観戦をしたりと仲の良い親子だったようである。しかし、春樹が30歳になり、小説家になったころにはその関係はかなり冷え切っていたという。その後、二人はほとんど絶縁状態となり、二十年以上まったく顔を合わせない状態が続いた。そしてようやく顔を合わせたのは父親が亡くなる直前で、その時父親は90歳を迎え、春樹は60歳近くになっていた。

この絶縁状態にはいくつかの理由があることが村上が語る父親との関係から推測される。まず一つ目に、父親と戦争に関する事柄である。村上の父親は一度目の徴兵で、京都市内の司令部に属する第十六連隊に配属された。しかし村上は、父親が亡くなってから数年後まで、配属されたのは第十六連隊ではなく、第二十連隊だと勘違いをしていた。第十六連隊に配属されることと第二十連隊に配属されることには大きな違いがある。それは、第二十連隊は南京陥落の時に一番に名乗りを上げた部隊であり、血生臭い評判があったということである。村上はその部隊が行ったことについて否定的な感情を持ち、そこに自らの父親が参加して

いた事実を受け入れるのに抵抗があったのだと考えられる。そのため村上は父親の従軍記録を調べることも、父親から直接話を聞くこともしなかった。そして事実を知ることはないまま父親は2008年に亡くなる。父の死後5年近くがたってから村上は調査に着手し、父は南京戦に参加していなかったという事実を知ることとなる。父が南京戦に参加したかもしれないという疑念は、長い間彼の中にわだかまりを作っていたと考えられる。

また、父親が村上に直接語った戦争の記憶もある。それは中国兵の捕虜を処刑した話で、村上は小学校の低学年の頃にその話を聞くことになる。村上の中のその記憶はあいまいで、父親はただその処刑を見ていただけなのか、もっと深く関わっていたのかは確かではない。しかしその中国兵が、「自分が殺されるとわかっていても、騒ぎもせず、恐がりもせず、ただじっと目を閉じて静かにそこに座っていた」(松井・村上 252) 様子であったり、当時処刑によく使われていた銃剣ではなく軍刀が使われたこと、そしてそれで首がはねられたことなどを村上に話し、「ひとつの情景として、更に言うならばひとつの疑似体験として」(松井・村上 253) 村上の心に強烈に焼き付くこととなった。村上は、南京戦や中国兵の処刑を負の歴史ととらえていたため、自分の父親がそれに関わった事実についても受け入れがたく感じていた。だからこそ父の死後まで彼の戦争に関する記録を確かめることもできず、本人に話を聞くこともできなかったのだと考えられる。そして父親と戦争との関わりに対しての否定的な感情は父親の死後まで続いたのではないだろうか。

戦争に関すること以外でも村上と彼の父親には軋轢の理由があった。ひとつは性格的な問題で、彼らは互いにかなり強固で、「そう易々とは自分というものを譲ら」ず、「自分の思いをそうまっすぐに語れな」かったという(松井・村上 264)。また、村上が父の期待に応えられなかったというのももう一つの理由である。彼の父親は学業を途中であきらめざるを得ない状況にあり、その代わりに息子には熱心に勉学に励んでほしいという思いが強かった。しかし村上は学校の授業には楽しさを感じられず、画一的、抑圧的であると感じていた。そのため、熱心に勉強をすることはなく、村上の学業の成績は特に秀でているわけではなかった。彼は本を読み、音楽を聴き、映画を観てガールフレンドとデートをするといったことの方が重要だと感じていた。そして父親は村上に対し「慢性的な不満」を抱き、村上は「慢性的な痛み(無意識的な怒りを含んだ痛みだ)」を感じるようになる(松井・村上 256)。そして彼は現在に至っても父の期待を裏切ってきた痛みを持ち続けている。今でも時々、学校でテストを受けていて、それに全く歯が立たずに焦る夢を見て、冷や汗をかいて目を覚ますことがあるという。

戦争に関する事柄や、性格上の問題、父親の期待への裏切りなど村上と彼の父親には様々な葛藤の理由があった。しかし村上は父の死の直前に衰弱しきった彼と顔を合わせ、「ごちない会話を交わし、和解のようなことをおこなった」(松井・村上 246)。そして村上は、子供時代の父親との共有体験が今の村上を作り出ているのだと気が付き、父親とのつながりを感じるようになった。そしてその後、村上は父親の戦争に関する記録の調査をし、自身の記憶の間違いに気が付くこととなる。父の死、そして父の人生に関する新たな事実を知っ

たことによって村上の父親に対する負の感情は次第に少なくなっていったと考えられる。

以上までは村上春樹とその父親の関係について見てきた。このことを踏まえ、『1Q84』に登場する親子関係と村上自身の親子関係についての関連性を明らかにする。まず、前節で考察した通り、作品に登場する親子関係は確執があることが特徴である。そしてその多くは親子関係を断絶しており、このことは村上親子と共通している。その中でも一番関連が深いと考えられるのは天吾とその父親である。この親子と村上親子には共通点がいくつかあげられる。天吾と父親、そして村上親子は生まれた年代も近く、両方の父親は戦争を経験して生き延び、戦後すぐに息子が誕生する。子供は一人であり、天吾も村上も大人になってからは作家として活躍する。一番大きな共通点は、大人になってから絶縁し、父親が死の淵にいる状態で和解のようなものにいたったことだろう。親子間の確執とその解消までのプロセスは村上自身の経験をもとに書いていると言われても違和感はない。また、完全な和解をしたのではなく、「和解のようなもの」までしか達成できなかったことも共通している。『1Q84』が出版されたのは村上の父親が亡くなった翌年で、村上は本作より前の作品では親子関係を描くことはほとんどなかった。このことから、父の死が作品に反映されていると考えられる。

前段では村上親子と天吾とその父親の共通点について見てきた。作中の親子の中でも村上と関連のないように思えるのは天吾、青豆とその子供である。彼らには親子愛のようなものが感じられ、作中で唯一、親子というものの良さが肯定的に表れている関係であるように思える。村上は亡くなる直前の父親と会話した際に、「考え方や、世界の見方は違っても、僕らのあいだを繋ぐ縁のようなものが、ひとつの力を持って僕の中で作用してきた」（松井・村上 265）ことを感じたという。もしも父の死の前、和解のようなものに達する前であれば、このような親子のポジティブな面について村上が考えることはなく、それまでの作品でも親子関係についてほとんど取り上げなかったことから、作中の天吾、青豆とその子供のような親子の描かれ方はされなかったと考えられる。

以上のように『1Q84』に登場する親子には村上自身の親子関係が大きく影響していることがわかる。父の死によって彼の親子に対する心境は変化した。そしてその心境の変化は作品に顕著に表れ、それは特に主人公の一人である天吾とその父親に反映されている。また、親子関係がストーリーにおいて前面に出ていることは、本作より以前の村上作品と本作が区別される理由の一つと言える。

本章では、作中に登場する親子関係の特徴と、村上自身の親子関係、そしてその二つの関連性について分析した。作品に登場する親子には確執があるという特徴があるが、天吾とその父親のみは関係を改善している。そしてその二人の関係は実際の、村上と彼の父親の関係に重なる部分があり、村上の父の死によって村上の中の父親に対する心情の変化が大きく影響していることが推測できる。また、本作より前の村上作品では親子関係が描かれることがほとんどなかったことから、この作品の執筆にあたり、村上の中で親子に対する考え方の変化があったと考えられる。本章で論じた親子関係を描く理由と記憶との関連性につい

ては第四章で考察する。

第三章 『1Q84』での善悪の在り方

『1Q84』では主人公二人と宗教団体「さきがけ」が敵対関係にあり、物語は主人公二人、そして「さきがけ」側の人間の目線から描かれる。多くの読者は主人公側の人々を正義ととらえて彼らにとっての良い結末を望み、「さきがけ」についてはその存在を否定的にとらえるだろう。しかし一見善良な存在に見える主人公側の人々には悪の側面があり、また「さきがけ」についても善、または善のように思われる側面が描かれている。そこで本章では善悪それぞれの側面のある登場人物、団体について分析した上で、作者がそれらを描く理由と描かれ方の問題点について考察する。

第一節 作中の善と悪の存在

本節では作中に登場する人物や団体についての善悪の側面について論じる。人物、団体の中でも、その行動や考え方に善悪両方の面があり、その表れ方が顕著である青豆、老婦人、宗教団体「さきがけ」について取り上げる。また「さきがけ」については団体のリーダーである深田保についても言及する。

まず、青豆についてであるが、彼女は普段スポーツインストラクターとして働き、その傍らで暗殺者としても働いている。彼女が暗殺するのは女性に DV をする男性たちで、その暗殺依頼は裕福な老婦人から受ける。殺人方法は青豆にしかできない方法で、殺害されたことは誰にも分らない。そのため青豆は完全犯罪が可能であり、何人もの男性を殺害してきた。彼女がそのような暗殺行為をする理由として、親友の大塚環が夫による暴力によって自殺したことがあげられる。彼女はその親友の夫を暗殺し、その後、スポーツジムの顧客として出会った老婦人のもと DV を行う男性の暗殺者として働き始める。親友の夫に対する恨みの気持ちはかなり大きく、殺害の際には「何があろうと世の終わりを確実に与えなくてはならない」(BOOK1 後編 40) と考え、入念な計画を練り、練習を重ね、殺害を実行した。その感情は DV を行うあらゆる男性へも向けられるようになり、青豆は暗殺を繰り返すようになったのだと考えられる。

次に、青豆に暗殺依頼をする老婦人について論じる。彼女は莫大な資産を持ち、何不自由なく暮らす女性である。一見幸せそうに見える彼女だが、娘は、青豆の親友の大塚環と同様に、夫の暴力が原因で自殺している。老婦人は青豆とは違い、娘の夫を殺しはしなかった。しかし彼女はその男の社会的地位を奪い、「世間的に破滅」させ、「生皮を剥ぐように」、「死なない程度に間断なく、慈悲なく苦しめ続けて」いるという (BOOK1 後編 152-153)。そして彼女は青豆と同様、DV を行う他の男性たちにも制裁が必要だと感じ、暗殺を青豆に依頼するようになる。彼女は潤沢な資金を用いて過激な暴力をふるう男性の情報を集め、そこから暗殺されるにふさわしい男性を決める。また、彼女は DV の被害を受けている女性に保護施設を提供し、彼女たちの身の安全を守っている。

作中で出てくる男性から女性への暴力はかなり過激なものが多い。大塚環においては、夫から「絶え間なくサディスティックな暴力」を受け、その行為は「偏執的な領域」にまで近

づいていた (BOOK1 後編 37)。また、宗教団体「さきがけ」から保護された 10 歳の女の子はレイプされ、将来の妊娠が不可能な状態に陥っている。以下は老婦人の娘が亡くなった際の描写である。

検死のとき、その身体に暴力のあとが発見された。打撲や激しい打擲のあとがあり、骨折のあとがあり、煙草の火を押し付けられたような数多くのやけどがあった。両方の手首にはきつく縛られたあとが残っていた。縄を使うことがこの男の好みであったようだ。乳首が変形していた。(中略) 夫は暴力を振るっていたことをある程度認めたが、それはあくまで性行為の一部として合意の上で行われたことであり、むしろ妻がそれを好んでいたと主張した (BOOK1 後編 151)

上記の引用から、物語中での暴力の描写は直接的、具体的に描かれていることは明らかであり、読者にかかなりの嫌悪感を与えていると考えられる。このことによって、暴力をふるう男性に制裁を下す青豆や老婦人の存在は正義のようにとらえられる。もちろん暴力をふるうことは悪であり、それをなくすことは善である。しかし暴力をなくす方法として暗殺という手段をとるということは、結局青豆と老婦人は暴力をふるう男性たち以上の悪をはたらいているということになる。また、暗殺方法は首に細い針を刺すという、相手に全く痛みや苦しみを伴わせないもので、「すべてはほんの一瞬のうちに終わってしまう」(BOOK1 前編 91) ことが特徴である。以下は DV を行った男性を青豆が暗殺をする場面である。

いったん位置を定め、心を決めると、彼女は右手のたなごころを空中に浮かべ、息を止め、わずかに間を置いてから、それをすんと下に落とした。(中略) あとは豆腐に針を刺すみたいに単純なことだ。針の先端が肉を貫き、脳の下部にある特定の部分を突き、蠟燭を吹き消すように心臓の動きを止める。(BOOK1 前編 90-91)

上記の引用から、暗殺に関して残酷な描写が含まれていないことが分かる。青豆が針を男に刺してから、男は「はっと息を呑」み、「全身の筋肉をびくりと収縮」させ、「バスケットボールから空気が抜けるときのように」、徐々に体の力が抜けて死んでいく (BOOK1 前編 91)。この暗殺方法について、青豆は、「世界にはいろんな死に方があるが、おそらくこれほど楽な死に方はない」(BOOK1 前編 92) と感じている。こういった描写によって、暗殺の描写は暴力の描写よりも軽く読めてしまう。そして過剰な暴力について読んだ後ではいとも簡単に暗殺される男性たちに対して同情の念もわきにくい。これらのことから、読者側は青豆と老婦人に感情移入をし、彼女たちの行いが正しいという錯覚に陥ってしまう。青豆と老婦人は暴力をなくすための活動をするという善良な一面があるものの、その活動の中心にある暗殺という作業は暴力をふるう男性たち以上に悪である。そしてその悪の面が読んでいる読者に伝わりにくいというのも事実である。

物語において青豆と老婦人の敵となる宗教団体「さきがけ」は、深田保をリーダーとする閉鎖的な宗教団体である。もともとは完全な共同生活を営み、農業で生計を立てるコミュニティであったが、宗教法人の認定を受け、その後は農作物の販売によって資金を得ながら宗教活動を行っている。リーダーの深田保は「リトルピープル」という、古代から存在する人間の力の及ばない未知の存在の声を聴くことができ、それを人々に伝える役割を担っている。また、彼は超能力のような力が使え、手を使わずに物を動かすことができる。しかしこれらの真偽は不確かであり、深田保がそう語っているに過ぎない。深田の子供は「リトルピープル」の声を聴く後継者になると考えられていて、「さきがけ」の複数の少女が深田との性交を余儀なくされている。それは一般の人から見ればレイプであるが、「さきがけ」では宗教行為の一環で必要不可欠なものとする。これらの情報が老婦人に伝わり、深田は青豆に暗殺されることになる。以上のことより「さきがけ」はいわゆるカルト宗教団体であり、宗教行為の内容は犯罪であることが分かる。

一般にカルト宗教は世間から非難の目を向けられ、犯罪行為を行う団体は無論、悪であり、その行為が宗教を理由に許されることはない。しかし、本作において「さきがけ」と深田保は完全な悪としてとらえにくい描かれ方がされている。というのも、「さきがけ」では信じられている普通ではありえない出来事を青豆や天吾が体験したり、深田に対して同情、共感させるような描写があるからである。このことによって深田の語ることの説得力が増し、その宗教行為や信念が正しいととらえることも可能である。

青豆に関しては、天吾と出会う前に天吾の子供を身ごもるという普通ではありえないことが起き、天吾に関しては、深田の娘が「さきがけ」にいたころに目にした「空気さなぎ」という未知の物体を父親の病室で目撃する。これらはいずれも「さきがけ」に関連する現象であり、深田の発言を正しいととらえることの要因となる。また、深田に関して、彼は青豆の天吾に対する愛情を把握しており、自分を殺せば天吾に危害が及ばずに済むという発言もしている。天吾を救い、深田を殺すことは青豆にとって利益になることであり、深田は青豆の手助けをしているようにもとらえられる。深田は「さきがけ」のリーダーでありながら「さきがけ」側の人間なのか、主人公側の人間なのか曖昧である。深田の話聞いた青豆はその内容に聞き入り、彼の暗殺の直前に「あなたを殺さなくても済む世界がきっとあったはずなのに」(BOOK2 後編 36)と言っている。また、暗殺直後にも「彼は狂言者ではなく...彼の言葉には説得力があった。大きな碓のような説得力だ」(BOOK2 後編 74-75)と感じている。これらの描写から青豆は彼の話にある程度納得させられ、彼に対して共感、同情の念が生まれたのではないかと考えられる。いずれにせよ「さきがけ」が行っていること、深田の言動は不確かなことが多く、その内容の一部は犯罪であることに変わりない。しかし深田を肯定的にとらえられる描写もあることや、青豆が深田に感情移入することで深田を完全な悪としてとらえるのが難しい側面もある。

青豆と老婦人については、暴力をなくすという正しい目的のもと、殺人という暴力よりも悪である制裁手段をとっている。しかし男性から女性への暴力の描かれ方が格段に激

しく、読者に嫌悪感を与えるため、読者は青豆と老婦人に感情移入し、彼女たちの暗殺を悪としてとらえられないことがある。また、宗教団体「さきがけ」や深田保に関しても、その活動内容が犯罪行為にまで及んでいるのにもかかわらず、主人公たちが「さきがけ」で信じられている超常現象を体験することや深田が肯定的に描かれることによって読者にとっては彼らを完全な悪としてとらえにくくなる。次節ではこれらの善悪の描写について、その問題点と利点について考察する。

第二節 あいまいな善悪の描かれ方による効果

前節での分析により、青豆、老婦人、宗教団体「さきがけ」と深田保についての悪の面に関して、読者がそれを悪としてとらえにくい描かれ方がされていることが分かった。本節ではそのような善悪のあいまいな描かれ方による効果と作者がそのような描き方をした理由について分析する。また、その分析を踏まえ、この描かれ方についての問題点についても指摘する。

村上の作品において、善悪がテーマの一つとなっている作品はいくつかある。『ねじまき鳥クロニクル』や『海辺のカフカ』、『アンダーグラウンド』などはその例である。これらの作品ではいずれも悪の立場が明確である。『ねじまき鳥クロニクル』においては主人公の妻の失踪原因となった男、綿谷ノボル、『海辺のカフカ』では猫殺しのジョニーウォーカー、地下鉄サリン事件についてのノンフィクション『アンダーグラウンド』ではオウム真理教というように、その邪悪性がはっきりと示され、『1Q84』のような善悪のあいまいな描かれ方はされていない。また、村上はエルサレム賞の受賞スピーチにて、政治的、社会的、武力的強者を壁、それらの支配下、攻撃対象となる弱者を卵に例え、常に卵の側に立つという発言をしている。この発言は、イスラエルが壁、パレスチナが卵に置き換えられ、イスラエルによるパレスチナ自治区への攻撃を批判したものである。この発言から、彼は武力を悪としてとらえ、それに対抗する弱い立場の者を擁護するという意思が明確であることが分かる。『1Q84』より前の作品や、作者自身の発言から彼の中の善悪の区分ははっきりしていると考えられる。

それではなぜ本作では善悪についてあいまいな描き方をしたのだろうか。宗教学者の島田によると、村上は作中で善と悪とはそう簡単に割り切れないことを描き出して、カルトのリーダーを批判しない、または批判できなくなっていると指摘する。また、本作ではカルト的な世界に一定の共感が生まれているため、村上がこちら側の人なのか、それともあちら側の人なのか、不明確になってきていると述べている(22)。しかし、島田の言うように、村上の中の善悪に対する姿勢が変わり、あいまいになったことによって作中で善悪の描き方もあいまいになったとは単純には言えないのではないだろうか。そのあいまいさというのは村上の考えを反映しているというよりもむしろ、読者や、多くの日本人の考えを反映し、それを描くことによって読者に気づきをもたらすことを目的としているのだと考えられる。例えばオウム真理教は人々がその邪悪性に気付かなかったことで最終的に地下鉄

サリン事件という大惨事が起きた。彼はこの出来事のように、人々の善悪の認識があいまいになり、それによって引き起こされる暴力的な行為に対して危機感を覚えているのではないだろうか。そしてあえて悪に対して読者が盲目になるような描き方をし、読者自身がその盲目さに気が付くことによって、その恐ろしさをさらに実感させるのが作者の意図であり、これが村上の小説技巧の一つと言えよう。

宗教団体「さきがけ」、そしてそのリーダーの深田保の、その邪悪性を感じさせない描かれ方や、青豆の宗教に対する姿勢の描写は、カルトに傾倒する日本人に対して警鐘を鳴らすために描かれていると考えられる。作中でカルトに傾倒する日本人を特に反映しているのは青豆である。青豆は小学生の時に「証人会」を脱退したものの、いまだに大仕事の前に「証人会」にいた時のお祈りをして自らの精神を安定させている。

青豆は目を閉じ、ほとんど反射的にお祈りの文句を唱えた。物心ついたときから、三度の食事の前にいつもこれを唱えさせられた。ずいぶん昔のことなのに一字一句まではっきり覚えている。天上のお方さま。あなたの御名がどこまでも清められ、あなたの王国が私たちにもたらされますように。私たちのささやかな歩みにあなたの祝福をお与えください。アーメン。(BOOK2 前編 187)

この描写から、青豆は「証人会」での教えや考えが体に染みつき、完全には脱することができてないことが分かる。文学研究者の越川は、青豆はカルトに対する嫌悪感を抱きながらも、幼いころにカルトとも言える宗教団体の中で生活していたために、彼女は「原理主義的な精神を抱え」ていて、村上の言う卵と壁で彼女を表現すると「内に壁を抱えた卵だ」と指摘している(202)。また、青豆は「カリスマに引きつけられる空虚な日本人の姿」(203)を反映しているとも述べている。カルトの思想から抜け出せない青豆は「さきがけ」のリーダー深田保のことを信じてしまい、彼に制裁を加えることについて疑問を抱き始める。カルトに一度染められた青豆だからこそ、深田に簡単に心を揺さぶられやすく、村上は意図的に青豆と深田とのやりとりを描いたのだと考えられる。カルトに染まった青豆のような思考はカルト宗教に傾倒する人々の思考を反映し、読者もその人々と同様、カルト団体の「さきがけ」、そして深田が悪なのかどうかの判断が難しくなる。青豆のカルトに対する姿勢と、読者自身もカルトの邪悪性に対して盲目になることによって、その惑わされる恐ろしさを読者に実感させるのが作者の目的だと考えられる。

青豆や老婦人の「正しいこと」に対する認識についても、「さきがけ」や深田保と同じように読者を惑わせる描写がされている。暗殺の対象者がしてきた暴力は過激に描かれて、読者は彼らに嫌悪感を抱き、暴力をふるわれた女性たちに同情する。そして暗殺による制裁は、老婦人によって繰り返される「正しいこと」という言葉によって正当化され、読者側も暗殺が悪であるという認識が薄れてしまう。島田は、「読者は、下手をすると、テロリストとも言うべき青豆に感情移入する可能性」(24)があると指摘する。青豆と老婦人の思想や暗殺

の描写は、暴力、殺人、武力といったものを、それを上回る凶暴性を持ったもので制裁することへの批判だととらえられる。それは村上がかつて卵と壁に例えたような戦争であったり、罪よりも重い刑罰など、広汎にわたると考えられる。村上は、日本の問題点は「戦争の圧倒的な暴力を相対化できなかったこと」(河合・村上 200-201)であり、「これから暴力の時代がもう一度来るんじゃないか」(河合・村上 204)と述べている。この発言からも、村上の、戦争や暴力に対する危機感を読み取ることができる。暴力に関連する事柄について私たちはその邪悪性に気が付かず、むしろ正しいものとして受け入れていることもある。青豆や老婦人の描写によって、悪を悪としてとらえられていないことを自覚させるのが作者の意図なのだと考えられる。

しかしながら、善悪をあいまいに描くことによって引き起こされる問題もある。単純に読むだけではカルトの邪悪性に気が付かず、むしろ深田の話の信憑性の高さが感じられる描写や、青豆が深田を完全な悪としてとらえきれず、彼に同情するような描写によって、カルトの悪の側面に対して読者は盲目になってしまう。盲目になっている自分に気が付くことによって作中で描かれる悪の恐ろしさがより浮き彫りになることが作者の意図であるとしても、それには物語を客観的、懐疑的にとらえる必要があり、そのような読者が多いとは考えにくい。また、青豆や老婦人の暗殺に関しても、暴力をふるった男性たちに対する嫌悪感をあおる描写によって、彼らを暗殺することの邪悪性に気づかない読者も多いと考えられる。むしろ老婦人の言う正義を真に受ける可能性もある。そうなれば読者は悪を悪ではないもの、むしろ正しいものとして物語を受容し、悪を善としてとらえてしまう恐ろしさを読者に自覚させるという作者の意図は達成されない。村上による善悪のあいまいな描写は、読者が悪を最後まで認識できない可能性がある点が問題である。

本節ではあいまいな善悪の描写の効果、問題点について考察した。『1Q84』より前の作品での善悪の描かれ方や彼の発言から、村上の中での善悪の区別は明確であると推測できる。しかし、これまでの作品と違い、本作では青豆や老婦人、宗教団体「さきがけ」や深田保について、善悪をあいまいに描いている。作者の意図として、カルトや暴力など人々が悪と認識しづらいものに対して悪としての自覚を持たせ、認識できていないことの恐ろしさを感じさせることが考えられる。一方で、あいまいな善悪の描写によって読者はその邪悪性を見抜けず、むしろ悪を善としてとらえたまま終わってしまうという問題点があることが分かった。

本章では作中における善悪の在り方と、それらの描かれ方による効果、問題点について分析した。作中で暴力が過激に描かれることによって、青豆や老婦人のように、暴力の制裁としての暗殺は正しいことであるという感情が読者にも芽生える可能性がある。宗教団体「さきがけ」や深田保については、行っていることは犯罪であるにも関わらず、深田の信憑性を高める描写によってその邪悪性が薄れている。こういったあいまいな善悪の描かれ方によって、読者が悪に対しての自らの盲目さに気づくことがあり、作者がこのような描き方をした意図もその点にあると考えられる。しかしこの描かれ方には読者が悪を悪としてとらえ

られないまま、作者の意図が達成されない可能性があり、それは問題点だと言える。次章では作中の記憶の描写について、善悪の描写と関連付けて考察する。

第四章 『1Q84』で描かれる記憶

『1Q84』では記憶に関する描写が多く登場し、その内容は戦争に関する描写が多い。それらの描かれ方は間接的に描かれるという特徴があり、記憶の描写とともに、その忘却や伝承が描かれている。本作以外でも村上の作品には記憶の描写は頻繁に登場する。本章でははじめに他の作品も取り上げ、記憶の描写の内容と描かれ方の特徴について分析する。次に作者が記憶を描く理由を彼の歴史記憶についての考え方を踏まえて考察する。また、第二章で論じた父親について、第三章で論じた善悪と記憶の関連性についても言及し、本作におけるテーマの中心としての記憶について分析し、作者が記憶を描いた理由を考察する。

第一節 作中の記憶に関する描写の内容と描かれ方の特徴

本作における記憶に関する描写の内容はそのほとんどが戦争や植民地の歴史と関連するものである。また、本作以外にも戦争や植民地の歴史の記憶が出てくる作品がいくつかある。『羊をめぐる冒険』(1982)、『ねじまき鳥クロニクル』(1994-1995)、「ノモンハンの鉄の墓場」(1998)、『騎士団長殺し』(2017)ではいずれも、第二次世界大戦に関する記憶が多く登場する。例えば、『ねじまき鳥クロニクル』ではノモンハン事変や満州国内の新京動物園で殺害された中国人の話が出てきたり、『騎士団長殺し』ではナチス、南京攻略戦についての描写がある。『1Q84』でもこれらの作品と同様、戦争に関する記憶の描写は頻繁に登場する。文学研究者の馮は、「村上春樹は戦争未経験者にも関わらず、彼の文学には「記憶」に執着する傾向が見え、戦争や植民地という「記憶」は中心となるテーマ」であり、「潜在的なものとして表出される」と指摘する(159)。このことは、村上の作品の中で描かれる記憶の多さから明らかである。

『1Q84』においては様々な登場人物に関連する記憶の描写がある。主人公の青豆は歴史に強い関心を持っており、バーでお酒を飲みながら満州鉄道についての本を読む場面がある。その本には満州鉄道の戦中と戦後での役割や機能について書かれている。この本を読む理由として、客を待つ娼婦に間違われなくするための意図もある。天吾に関しては、彼の父親の終戦直後の経験を幼いころから何度も聞かされていた。そのことについて回想するシーンがあり、自分のことではないにも関わらず、かなり詳細なところまで記憶している。また、父親と満州についての描写は複数登場する。老婦人の屋敷で護衛をしていて、青豆と親しいタマルも終戦直後の自分の記憶を話す。彼は終戦の年にサハリンで生まれ、戦後は両親と離ればなれになり、彼は北海道に連れていかれ、孤児院で育つこととなったという記憶を青豆に語る。

本作では登場人物の記憶が描かれるとともにその喪失も描かれている。まず、青豆が「1Q84年」というパラレルワールドに自分がいると気づいたことのきっかけとして、記憶の喪失がある。彼女は警察官を目にした際に、彼らの所持する拳銃の種類が変わっていることに気が付く。他にも彼女が知らない事実がいくつかあり、そのことに関し、「問題があるのは私自身ではなく、私をとりまく外部の世界なのだ(中略)自分の意識に何か欠損やゆが

みがあるという実感が、どうしても持てなかった」(BOOK1 前編 249) というように感じている。

天吾の父親に関しては、アルツハイマー病を患い、天吾についての記憶も、自分自身の経験もほとんど正しく覚えていない。天吾から見た天吾の父親は、「空白と記憶がせめぎあってい」て、「やがては空白が、本人がそれを望もうと望むまいと、残されている記憶を完全に呑み込んでしまう」(BOOK2 前編 236) だろうと予測する。天吾は、自分と父親は本当に血がつながっているのかということや、天吾が幼いころに亡くなった母親はどんな人だったのかというような、父の記憶の中にしかないものについて知りたいと感じていた。しかしそれを聞くことなく彼の父親は亡くなってしまい、事実は謎のままで終わってしまう。

また、個人の記憶ではなく、歴史記憶の忘却について語られる場面もある。青豆の友人のあゆみは、自分が子供のころに受けた性的な嫌がらせについて、歴史上の大虐殺と関連付け、「やった方は適当な理屈をつけて合理化できるし忘れてもしまえる」が、「やられた方は忘れられない」と語る。また、世界というのは「一つの記憶とその反対側との記憶の果てしない闘いなんだ」(BOOK1 後編 324) という考えを持っている。あゆみのこれらのセリフから、彼女は記憶の忘却や、歴史上の大虐殺など、悪の歴史の正当化について問題視していると考えられる。

また、天吾は歴史の書き換えに対する問題意識を持っている。フカエリから、ジョージ・オーウェルの『1984年』(1949) を声に出して読んでほしいと頼まれた際、歴史の改ざんを仕事とするその作品の主人公と絡めて、歴史の書き換えについて語り始める。歴史は「集合的な記憶」であり、「それを奪われると、あるいは書き換えられると僕らは正当な人格を維持していくことができなくなる」ため、「正しい歴史を奪うことは人格の一部を奪うのと同じことなんだ。それは犯罪だ」(BOOK1 後編 240-241) と結論付ける。このセリフから、歴史の喪失は人格の喪失にもつながるという天吾の考えが読み取れる。また、本作のタイトル『1Q84』はオーウェルの『1984年』というタイトルを元にしてつけられたと考えられ、天吾のセリフからも、歴史記憶の書き換えや喪失といったテーマを引き継いでいるととらえられる。

正しい記憶が失われる場面が描かれる一方で、それとは対比的な記憶の伝承も村上作品の中で描かれることが多々ある。『ねじまき鳥クロニクル』では間宮中尉が主人公にノモンハンでの自身の経験について語り継ぐ場面や、シナモンが自身の祖父が満州の動物園で目にした中国人殺人の記憶を引き継ぎ、その記憶を主人公に伝える場面が出てくる。『1Q84』では天吾の父親が天吾に自身の記憶を語るシーンがある。その内容は、天吾の父親が終戦後に満州から命からがら日本に帰り、結婚して天吾が生まれるまでの話である。しかしそれは天吾の父親が語りたくない部分だけの記憶であり、前述のとおり天吾の母親や、天吾と父親の血縁関係については語られない。「ある場合には、死んだ人はいくつかの秘密を抱えていってしま」い、「その秘密は秘密のままで終わってしまう」(BOOK3 後編 240) というように、記憶が父親の死によって失われている。本作では記憶の伝承を描くとともに、記憶の伝承の

失敗についても描かれていると言える。

以上のように本作では戦争に関する記憶の描写が登場する。これらの描写の特徴として、感情抜きに、間接的に語られることがあげられる。また、ストーリーとの関連性も薄く、記憶の描写がなくてもストーリーは成り立つにもかかわらず、その分量は時に数ページにもわたる。まず、感情抜きの間接的な描写であるという特徴は、記憶を本人以外の人が語り、そして本人が語るとしてもその人はただ事実のみを語り、感情を含めないことによって生まれる。以下は老婦人の護衛のタマルが、終戦直後にサハリンから日本に来た経験について語る場面である。

まだ赤ん坊だった俺は、日本人の帰国者の手に託されて、北海道に渡った。当時のサハリンの食糧事情は最悪に近いものだったし、ソビエト軍の扱いもひどかった。両親には俺のほかにも何人か小さな子供がいたし、俺をそこで育てるのはむずかしそうだった。先に一人で北海道に帰しておいて、あとで再会できると思ったんだろう。あるいは体よく厄介払いをしたかっただけなのかもしれん。詳しい事情は分からん。いずれにせよ再会することはなかった。両親はたぶん今でもサハリンに残っているはずだ。まだ死んでいなかったらということだが。(BOOK2 前編 38)

彼はソビエト軍や自らの両親が行ったことに対して怒りや悲しみを表さず、そこに彼の感情はほとんど読み取ることはできない。事実のみを淡々と語っており、一個人の記憶というよりも、多数の人に当てはまる歴史的事実について提示しているような印象を受ける。他にも、青豆の読む歴史の本は青豆が体験したものではなく、単に本に書かれている事実のみが、引用するようにして書かれている。文学研究者の馮は、この叙述について、「語り手が何気なく読者に歴史の知識を教えているようなスタンスを取って」て、娯楽に間違われないうために本を読むというのは、歴史の叙述の登場の「唐突さを緩和する効果がある」と指摘する(110)。確かにこの本の内容はストーリーと関係がなく、登場の仕方は唐突で、読者に歴史的事実を提示するのが目的だととらえられる。他にも、天吾が回想するのは彼の父が自身の経験を語る場面であり、天吾との深い関連性はない。馮は、作中の「歴史の記述は、読者に歴史を想起させる作用があるとはいえ、結局エンターテインメント性に満ちた雰囲気呑み込まれて、その作用が弱められる」(111)と主張する。しかし、エンターテインメントの中に記憶の描写が埋め込まれるからこそ、読者に自然に歴史を提示できる面もあるとも考えられる。

また、作中の記憶の描写のもう一つの特徴として、集合的な記憶であるという点があげられる。作中において個人が語る記憶は、その人自身のものである一方で、前述したように、間接的で感情を含まない描写や、記憶の内容が多くの人と同じ経験であることから、語り手を通して多数の人々の記憶を描いているととらえられる。天吾の父のように満州から引き揚げた日本人や、タマルのように樺太で両親と離ればなれになった朝鮮人は多数いる。また、

あゆみの性的嫌がらせの体験の語りも、最終的に虐殺という歴史に結びつき、個人の記憶の語りは集団の記憶に行き着く。天吾も歴史を集合的記憶であると語り、その書き換えの問題点を指摘している。

村上は『ねじまき鳥クロニクル』における歴史と、間宮中尉のノモンハンの記憶について、「僕の言う『歴史』は、たんなる過去の事実の羅列でも引用でもなく、一種の集合的記憶としての歴史で」あり、間宮中尉の経験は「現在に直接の作用を及ぼしているもの」だと語っている（村上・西江 26）。この発言からも村上が作中で描いているのは個人の記憶ではなく、個人の記憶を通じた多数の人々の記憶についての描写を意識していると予測できる。

村上の作品では記憶の描写、その中でも戦争や歴史の記憶が描かれることが多く、『1Q84』もその例外ではない。青豆の読む本や、天吾の父親の満州の記憶、タマルのサハリンの記憶などがその例である。また、記憶の忘却は、『1Q84』という世界に迷い込むきっかけとして描かれたり、天吾の父親や青豆の友人のあゆみを通じて描かれる。記憶の書き換えは本作のタイトルのもととなったオーウェルの「1984年」に通じるテーマであり、天吾によってその問題点が語られる。正しい記憶が失われる場面が描かれる一方で、それとは対比的な記憶の伝承も村上作品の中で描かれることが多々ある。『ねじまき鳥クロニクル』の間宮中尉の語りや、本作においての天吾の父親の語りなどがその例である。これらの記憶は間接的に描かれ、そのことで個人の記憶ではなく集合的記憶としてとらえることもできる。次節では本節で分析した記憶の内容、忘却や書き換え、伝承や描き方の特徴について、作者が本作で描いた理由について考察する。

第二節 作者が記憶を描く理由

本節では、村上自身の記憶に対する考え方を彼の発言や作中での描写から推測し、それを踏まえて本作における記憶の描写の意味づけを行う。また、第二章、第三章にて論じた親子、善悪の描写についてと記憶の描写との関連性を分析する。そして最後に、本作における主要テーマを明らかにする。

まず、記憶の喪失の描写について、村上は戦争経験者が亡くなることによって彼らの記憶が失われることに危機感を抱き、それを作品に反映しているのだと考えられる。エルサレム賞の受賞スピーチにて村上は以下のように語っている。

My father died, and with him he took his memories, memories that I can never know. But the presence of death that lurked about him remains in my own memory. It is one of the few things I carry on from him, and one of the most important.
(169)

上記のスピーチから、村上は父親が亡くなったことによって、死とともに失われる記憶に対して意識するようになったと考えられる。作中にて、主人公の天吾は、「ある場合には、死

んだ人はいくつかの秘密を抱えていってしま」い、「その秘密は秘密のままで終わってしま」う」(BOOK3 後編 240) と語る。父親との関係性や境遇が村上と似ている天吾が発言していることから、作者の、記憶の喪失に対する意識が反映されている発言ととらえられる。

記憶の喪失というのは、その記憶を持つ人が亡くなることだけで起こるわけではない。歴史の書き換えも記憶が失われる原因の一つである。作中では天吾がオーウェルの『1984年』の話と関連付けて、歴史の書き換えについての問題を指摘した。歴史というのは多数の人の記憶としてもとらえられることができ、書き換えられた歴史を見た人にとってはそれが正しい歴史となり、記憶となる。村上は、歴史の書き換えによる記憶の喪失を問題視し、オーウェルの『1984年』というタイトルから『1Q84』というタイトルをつけ、作中でも『1984年』について言及される場面を用いたのだと考えられる。

記憶を持つ人々が亡くなること、歴史が書き換えられることによる記憶の喪失を防ぐものとして、村上は記憶、その中でも特に戦争や歴史の記憶の継承を重視していると推測できる。村上は、「僕は戦後生まれで直接的な戦争責任はないけれど、記憶を引き継いでいる人間としての責任はあります。歴史とはそういうものです」(166) と語り、戦争責任は自分にもあるということを、記憶と関連付けて述べている。文学研究者の明里は、村上は戦争の責任について「忘却に無意識な日本人への苛立ちを隠さない」(73) と指摘している。The Wall Street Journal にて、村上は、日本人とドイツ人とを比較した時に、日本人は戦争に対する責任感が薄いという意見を述べている。この発言からも、村上が日本人の戦争に対する無責任さを問題視しているのは明らかである。戦争責任を感じていない日本人には、その責任感のなさから歴史への無関心があり、それが記憶の継承が疎かになることにつながる。そして失われた記憶によって責任感がさらに薄れるという悪循環に陥っている。記憶と、それともなう責任感を持ち続けるために記憶の継承を村上は重視していると考えられる。

村上は作中にて、日本人の記憶の無関心さを天吾を通じて表したかったのだと考えられる。天吾は父親が語った満州からの引き揚げの経験を記憶しているものの、それ以上のことは何も知らず、父親に尋ねることもしなかった。また、自分と父親の血縁について、母親についても謎のままである。そして父親は亡くなり、彼の中の記憶は永遠に失われることになる。「NHK に入る前の父親の人生を示す記録は、その封筒にはひとつとしてなかった。まるで NHK の集金人になったところから、父親の人生は開始したみたいだった」(BOOK3 後編 187) という描写から、NHK に入る前の父親の記憶は父親の中にしか残っておらず、彼の死によって永遠に失われたことが分かる。馮は、天吾の父親の遺品の中に、満州から引き揚げて、働き始めるまでの記録がないことは、彼の満州での体験や戦争の記憶が忘却される危険があることを示していると指摘する(118)。記録が何もない中、息子という立場の天吾が父親の記憶を引き出さない以上記憶は何も残らない。このことは記憶の継承を行わず、戦争の記憶が失われることの危機を示していると考えられる。また、村上は天吾という自分と同じ世代の年齢のキャラクターを作り上げ、戦争を経験した親を持つ自分自身の世代の戦争責任に対する無関心さを示したかったのだと考えられる。

ここまでは村上の歴史記憶に対する考えと、作中での反映のされ方について分析した。それでは第二章で論じた親子関係、第三章で論じた善悪と記憶についてはどのような関連性があるのだろうか。まず、第二節で論じた通り、本作で登場する主な親子関係は主人公二人とその子供以外、一度は関係を断絶している。天吾とその父親は最終的に関係の修復に近いものに達するが、すでに父親のアルツハイマー病が進行しており、完全な修復には至らなかった。このような親子関係の断絶を描いたのは、関係の断絶によって世代間の記憶の継承が行われず、記憶が途切れることを描きたかったからではないだろうか。それは特に村上と境遇が似ている天吾とその父親において顕著に表れている。父親が記憶を天吾に語ることなく亡くなったことは、村上と彼の父親との関係と類似している。自分の父親の死によって村上が実感した記憶の喪失と、断絶関係によって失われる記憶がより多くなることを村上は作品で示したかったのだと考えられる。

第三章にて論じた善悪について、記憶は善悪のあいまいさと関連すると考えられる。例えば、青豆や老婦人について、彼女はDVを絶対的な悪と認識し、DVを行った男性を暗殺することは正義だと考えている。本来ならば殺害という行為のほうが暴力よりもさらに邪悪性が高いにもかかわらず、彼女たちがそうとらえられていない理由としてDVに対する記憶が残っていることがあげられる。青豆と老婦人は直接のDVの被害者ではないものの、家族や親しい友人をDVによって亡くしている。その経験が暗殺の動機となり、記憶に残り続けることによって、彼女たちは暗殺を繰り返しているのだと考えられる。一方彼女たちには暗殺に対する罪悪感はなく、むしろ正しいこととして暗殺を行う。

「何ひとつ心配しなくていいのよ」と女主人は言った。口調はいつの間にかもとの穏やかさを取り戻していた。目には暖かい光が浮かんでいた。彼女は青豆の腕に軽く手を添えた。「私たちは正しいことをしたのだから」青豆は肯いた。いつも同じセリフで話は終わる。(BOOK1 前編 200)

この描写のように「正しいこと」というセリフは頻繁に登場する。老婦人と青豆は、暗殺によってDV被害を受ける女性たちを救うことを正義と考え、暗殺は悪であるという認識がない。彼女たちには暗殺を悪ととらえられる経験や記憶がなく、DVの被害者側の人間であることが彼女たちの暗殺は正義という考えを助長する。

村上が重視する戦争の記憶についても、その記憶が失われることで人々が戦争の悪の側面に気が付けなくなるということにつながる。戦争を経験していない世代は戦争を経験した世代からその記憶を受け継ぐことしかできない。しかしその受け継ぎがおろそかになることによって戦争が善なのか悪なのかの判断は難しくなる。このことは青豆と老婦人が暗殺を正義だと考える構図と似ており、村上は記憶が人に与える影響についてこの作品の記憶の描写で示したかったのではないだろうか。

現在は戦争を経験した世代が減少し、教科書でしか歴史に触れる機会がないという人も

多いだろう。親や身の回りの人に戦争経験者が多かった世代は口伝で聞く機会も多かったはずである。そして戦争経験者から直接話を聞くことで戦争の記憶はより鮮明に伝わり、聞く側も戦争を追体験することも可能だったかもしれない。しかし現在はそういった機会が少なくなり、戦争と自分たちの関わりをほとんど感じていない人々も多いだろう。村上の作品は本作を含め、記憶の描写は多く登場するものの、歴史や戦争をどうとらえるべきか、ということは提示されていない。歴史に関わりを持たない人、関心のない人が作品を読むことで考える機会を生み出し、あえて作者の意見や感情を含めないことで、読者自身が自分の考えを見つけ出せるように促しているのではないだろうか。そして本作は、エンターテインメント性が高く、どんな世代も読みやすい内容であるため、戦争、歴史の記憶について触れる機会のきっかけとなる作品として有効であると言える。

村上は記憶の忘却をデメリットとしてとらえていると推測できるが、その一方忘却のメリットとして国同士、人同士の和解が促進されるという点があげられる。戦争によって被害が大きかった国が相手国やその国民を憎むのは当然のことであり、実際に過去の歴史が現在の国同士の関係に悪影響を及ぼすことは多々ある。そういった問題もすべての人が歴史を忘却してしまえば起こることはないはずだ。しかし、負の歴史の記憶を失うことで和解が生まれるとしても、記憶がないからこそまた同じ負の歴史を繰り返す可能性は高くなるだろう。記憶を失い、負の歴史としての認識がなければ、その歴史の悪の面は見えづらくなる。忘却し、和解し、また負の歴史を生み出すというサイクルに陥らないためにも、記憶を受け継ぐことは重要だと考えられる。

以上の分析により、村上は記憶の喪失、特に戦争や歴史の記憶の喪失に対して危機感を抱き、それを作中で示していることが分かった。そして、その手段として自分自身が父親の死によって失った記憶を作中に登場する親子関係に反映させており、それは特に天吾とその父親に顕著に表れている。また、記憶というのは人々の善悪の判断にも影響を与え、村上は戦争や暴力の記憶が失われることで人々がその邪悪さに気が付けなくなってしまうことを問題視していると考えられる。そのため、作中では善悪のあいまいさが描かれ、そこから記憶が失われることの問題点が示されている。戦争を経験した世代が減少し、歴史に関心がない人々が多くなっている中、本作は歴史にコミットするきっかけとして有効な作品であると言える。

本章では本作における記憶の描写の内容、そして村上が記憶を描く理由についての分析を行った。本作での記憶の描写は戦争や歴史に関連するものが多く、それは他の作品についても同じことが言える。本作では記憶の描写とともにそれらの記憶の喪失、書き換え、伝承が描かれている。そして記憶の描写の特徴として、感情を含まない、間接的な記憶の描写であることがあげられる。そのことによって作中で描かれる記憶は個人のものではなく、多数の人々の記憶を表しているのとらえられる。記憶が描かれる理由として、村上が戦争に関する記憶についての忘却に対する危機感を持っていることがあげられる。彼は記憶が失われることを自身の父親が亡くなったことによって実感した。そして記憶の忘却によって、その

記憶に伴う責任感も同時に人々の心からなくなってしまうことに危機感を覚えた。村上は自分と境遇の似ている天吾というキャラクターを作り上げ、自分の経験と考えを彼に反映させている。記憶は善悪の判断にも影響し、戦争やカルト宗教など、本来悪であるはずのもの記憶がなくなることで、人々がその悪の側面に気づかないことに対して村上は問題視し、あいまいな善悪と記憶の描写を作中に取り入れたのだと推測できる。村上は本作にて、記憶を失うことによって人々が戦争に対する責任感を喪失することや、悪の側面に気づけなくなることに危機感を覚え、記憶の継承の重要性を読者に伝えようとしたのだと考えられる。そして本作は歴史の記憶に関心がない人々に考えさせるきっかけを与える手段として有効であると言える。

終章

村上春樹は現在日本でもっとも有名な作家である。本論文では彼の代表作の一つの『1Q84』を取り扱った。本作は世界 20 カ国以上で翻訳、出版され、多くの人に読まれていることから、文学界、そして読者への影響があることは確かだろう。彼は初期作品では社会との関わりを持たない作品を書くことが多かったが、長期間の海外生活や、阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件などをきっかけに、作家として作品を通じて社会へのメッセージを描くことを意識し始めた。本作は社会との関わりを作者が描き始めた以降の作品の一つであり、本論文では作品の主要テーマと作品に込められたメッセージを明らかにすることを目的とし、分析を行った。その分析方法として、作中で頻繁に描かれる、親子、善悪、記憶という三つの視点から解明を試みた。また、作者の生い立ちや、インタビュー取材などについても言及し、彼の考え、経験が作中でどのように反映され、それが主要テーマ、メッセージ性と関連しているかを考察した。

第一章では村上の作品の評価と特徴について論じた。日本での彼の作品に対する評価は高評価と低評価に分かれており、それは他の作家よりも顕著である。彼の作品に対する批判がある理由として、村上以前に高評価を受けていた私小説、純文学といった文学のジャンルから外れていたことがあげられる。現在では多くの人が彼の作品を読むようになり、その作風が一般化してからは批判されることも少なくなった。欧米では、彼の作品は漫画やアニメなどと同様、1980 年代以降の新たな日本文化、特にポップカルチャーの一部としてとらえられている。一方中国では、彼の作品には日中に関する歴史の描写が多く登場するので、作品への着眼点が歴史であることが多いと考えられる。また、彼の作品の特徴として、日本文学らしさの欠如があげられる。村上は日本文学に対して否定的な意見を持っていたため、純文学、私小説といったそれまで日本で主流だった文学を書くことを拒んだ。日本文学らしさの欠如の一因として彼の作品には多くの西洋文化が登場することもあげられる。また、作中の登場人物たちは個として行動することが多く、集団、組織を大切にするという日本人の特徴がほとんどの登場人物において当てはまらないことも特徴的である。

第二章では『1Q84』に登場する親子について論じた。本作で登場する主な親子にはそれぞれ確執があるのが特徴である。主人公の一人の青豆の家族は「証人会」という宗教団体に所属しており、彼女もその一員だった。しかし彼女はそれを苦痛に感じ、小学生の時に家を出て行く。脇役の一人のフカエリは父親が宗教団体「さきがけ」のリーダーであるが、彼女も青豆と同様、宗教団体の活動内容に否定的な意見を持ち、そこから抜け出す。もう一人の主人公の天吾は父親に育てられたが、父親の仕事のやり方や、性格的な不一致により高校時代からほとんど顔を合わせないようになる。しかし、天吾は父親が亡くなる直前に父親に会いに行き、そこで二人は和解に近い状態に至る。天吾とその父親の関係は村上自身の親子関係と似ている点が多い。村上と父親は、性格上の問題や、村上が父親の戦争に関する事実について勘違いしていたことで溝が生まれ、ほぼ断絶状態に陥っていた。しかし、父親が亡くなる直前に和解に近い状態に至り、関係を改善することができた。天吾とその父親は、

村上と彼の父親を反映した親子であると言える。

第三章では『1Q84』における善悪の在り方について論じた。青豆と老婦人は親しい友人や家族を DV によって亡くした経験から、DV を行う男性たちを憎んでいる。そして、彼女たちは暗殺という形で彼らに制裁を加える。作中では DV の描写が過激に描かれることから、読者は青豆たちに感情移入し、暗殺を悪ととらえにくい。また、宗教団体「さきがけ」の深田保は、少女たちをレイプするという犯罪行為をしているにもかかわらず、完全な悪としてとらえることが難しい。その理由として「さきがけ」で信じられている超常現象を青豆や天吾が経験すること、また深田が青豆に寄り添うような発言をすることによって深田に信憑性が生まれることがあげられる。このように本作では善悪がかなりあいまいに描かれている。しかし、村上は本作の前の作品では善悪を明確に分けた描き方をしていた。そのことから、彼の中では善悪の区別ははっきりしていると考えられる。それにもかかわらず、本作における善悪の描かれ方が最初から最後まであいまいなのは、悪に盲目になることの恐ろしさを読者に伝えたかったからではないだろうか。一方、善悪をあいまいに描くことは、読者が悪に気づくことができず、むしろ本来は悪のものを善としてとらえてしまうという問題点がある。

第四章では作中で描かれる記憶について論じた。村上の作品では戦争に関する記憶が多く描かれ、本作も例外ではない。作中では青豆、天吾の父親、タマルが戦中、戦後の満州や樺太についての記憶を語るシーンが描かれている。また、記憶の喪失、継承も作中で多く描かれている。本作では記憶が間接的に、感情抜きに描かれるのが特徴である。その特徴によって記憶は個人のものでなく集団的記憶であるのとらえることができる。村上が記憶を描くのは、戦争や歴史の記憶が失われることへの危機感を抱いているからだと考えられる。村上は戦争経験者である父親の死によって記憶の重要性を実感し、天吾とその父親の間の記憶の伝承を描いたのではないだろうか。また、作中で親子の断絶を描いた理由も記憶と関連し、親子関係の断絶によって戦争や歴史の記憶という、親子で受け継がれるべきものが失われることへの危機感を示したかったのだと考えられる。記憶は人々の善悪の認識にも影響を与える。青豆や老婦人が DV を絶対的な悪ととらえるのは、親しい人を DV で亡くした記憶が原因となっている。暗殺を悪ととらえられていない彼女たちを描くことによって、戦争や暴力の記憶のない人々が、本来悪のものを悪としてとらえられないことの恐ろしさを村上が伝えようとしているのだと推測される。そして、本作は戦争、歴史の記憶について読者が触れるきっかけとなる作品になり得るだろう。

上記のことから、本作において多く描かれる親子やあいまいな善悪の描写は結果的に記憶というテーマにつながり、記憶が本作の主要テーマであることが結論づけられる。そのテーマを描く理由として、記憶の喪失や、記憶の伝承がされないことに対する作者の危機感があり、特に戦争や歴史についての記憶が失われることに対して作者は警鐘を鳴らしていると考えられる。彼が危機感を覚えたきっかけとして彼の父親の死があり、その経験は登場人物の一人の天吾に反映されている。彼の作品で記憶が描かれる作品はいくつかあるが、その

中でも本作は彼の経験、考え方が顕著に表れている作品と言える。歴史記憶の喪失に対して危機感を抱く作者は、本作を通じて記憶の伝承の重要性を読者に伝えようとしていると考えられる。歴史記憶をあえて作者の意見や感情を含めず描くことで、読者自身が記憶に対する自分の考えを見つけ出しやすくなっており、その描き方によって記憶を受け継ぐ重要性を伝えるという村上の意図は達成されていると判断できる。本作は戦争や歴史の記憶の重要性に読者が気付く機会になり得ると考えられ、そのことを見出した点に本論文の意義がある。

参考文献

- Benedict, Ruth. 1946, *The Chrysanthemum and the Sword*. New York, Mariner Books. 2006.
- Berkeley University of California “What Haruki Murakami talks about when he talks about writing” 2008,
https://www.berkeley.edu/news/berkeleyan/2008/10/15_murakami.shtml.
- Suter, Rebecca. *The Japanization of Modernity: Murakami Haruki between Japan and the United States*. Harvard University Press. 2008.
- The Guardian “Haruki Murakami: 'My lifetime dream is to be sitting at the bottom of a well’” 2014, <https://www.theguardian.com/books/booksblog/2014/aug/24/haruki-murakami-my-lifetime-dream-is-to-be-sitting-at-the-bottom-of-a-well>.
- The New York Times “Roll Over Basho: Who Japan Is Reading, and Why.” 1992,
www.nytimes.com/1992/09/27/books/roll-over-basho-who-japan-is-reading-and-why.html.
- The Wall Street Journal “Who Will Tell the Story of Japan” 2006,
<https://www.wsj.com/articles/SB116562295303545083>.
- 明里千章「村上春樹『1Q84』における「記憶」」『日本文学』61巻, 11号, 千里金蘭大学, 2012, pp.70-74.
- 飯窪成幸『文藝春秋 教科書が教えない昭和史』文藝春秋, 2009.
- 宇野常寛『リトルピープルの時代』幻冬舎, 2015.
- 大胡田若葉・早川誓子『心を揺さぶる平和のメッセージなぜ、村上春樹はエルサレム賞を受賞したのか?』ゴマブックス, 2009.
- 河合隼雄・村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』岩波書店, 1995.
- 河出書房新社編集部『村上春樹『1Q84』をどう読むか』河出書房新社, 2009.
- 塩田勉「村上春樹『1Q84』を読み解く：連想複合の文体論的解明」『Waseda Global Forum』6巻, 2010, pp.241-64.
- 塩濱久雄「村上春樹の「非翻訳文体」」『神戸山手大学紀要』第13号, 2011, pp. 33-47.
- 施小「インターネットで見る中国における村上春樹『1Q84』の受容」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌』2巻, 2014, pp.161-168.
- 新潮社「村上春樹 Haruki Murakami」新潮社公式サイト. 2019,
www.shinchosha.co.jp/harukimurakami/.
- 柴田勝二・加藤雄二『世界文学としての村上春樹』東京外国語大学出版会, 2015.
- 戴曉晨「村上春樹『1Q84』におけるサブシステム」『大学研究年報 文学研究科篇』第47号, 2017, pp.1001-1019.
- 津田保夫「村上春樹の短編小説集『神の子供たちはみな踊る』：デタッチメントからコミ

- ットメントへ」『言語文化共同研究プロジェクト』, 大阪大学, 2015 卷, 2016, pp.21-30.
- 西江雅之・村上春樹他『考える人 NO33 村上春樹ロングインタビュー』新潮社, 2010.
- 馮英華「村上春樹『1Q84』における歴史記憶の語り方」『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』219 卷, 2011, pp.108-19.
- . 「村上春樹作品における想起の空間—『1Q84』における近代植民地についての語り」『千葉大学人文社会科学研究』26 号, 2013, pp.159-79.
- 平林美都子「村上ブランドはなぜ売れるのか? : アメリカ的消費文化から世界的消費文化へ」『愛知淑徳大学論集 文学部・文学研究科篇』34 号, 2009, pp.1-12.
- 松井一晃・村上春樹他『文藝春秋「令和」の未来年表』文藝春秋, 2019.
- 村上春樹『1Q84 BOOK1 前編』新潮社, 2009.
- . 『1Q84 BOOK1 後編』新潮社, 2009.
- . 『1Q84 BOOK2 前編』新潮社, 2009.
- . 『1Q84 BOOK2 後編』新潮社, 2009.
- . 『1Q84 BOOK3 前編』新潮社, 2010.
- . 『1Q84 BOOK3 後編』新潮社, 2010.
- 村上春樹研究会『村上春樹の『1Q84』を読み解く』データ・ハウス, 2009.
- 山愛美「村上春樹の創作過程についての覚書(4) 言葉・身体性・文体」『人間文化研究』36 卷, 2016, pp.149-68.
- 吉岡栄一『村上春樹とイギリス - ハルキ、オーウェル、コンラッド』彩流社, 2013.